

キョウカンという名のキョウフ

安中市立松井田中学校

3年 土屋 和紗

「え、もうこれで良くない？」

「いいじゃん、それで！」

友達の一言一句が次々と空気を形づくっていく。

「…じゃあ決まりってことで。」

話し合いはその一言で終わった。誰もが納得した様子で、その意見が正しいと思われた。だが私は、納得していなかった。もっと話したかった。言いたいこともあった。でも、その場の空気感が怖くて何も言えなかった。うまく声を出せない、ゆっくりと首がしめられていくような、息苦しいほどの怖さを感じました。

さて、みなさんは友達と意見が相違したとき、「怖さ」を感じますか？私はあの時、一つの共感が他者へ他者へと波紋のように広がったときの逆らえないという怖

さをはっきりと感じました。そもそも、どうして私達は周りとの意見が違ったときに、これほどの恐怖を感じてしまうのでしょうか。私なりに考えてみました。

まず第一に、周りの意見に対して自分だけが違和感を抱いていることへの気づきです。皆が同じ方向を向いている中で、自分ひとりが違う景色を見ているような感覚。それが最初の引き金になります。

第二に、その違和感による共感できない自分への強い孤独感です。周りの輪から自分だけがはじき出されたような、そんな寂しさです。

そして第三に、その孤独がやがて自分が否定されるのではないかという「恐怖」へと変わっていくのです。周りとのズレ、そこから生まれる孤独、そして孤独への恐怖。これがまさに「共感という名の恐怖」と言えるでしょう。

当時の私は、この恐怖から逃れるために「沈黙」という共感を選びました。周りに合わせて、心にもない共感の態度を演じてしまったのです。その数秒の沈黙を使って逃げた事により、尊重されなかった意見があ

り、今も傷ついたままの心があります。共感することが最善ではないと分かっている、恐怖から自分を守るためにあわせてしまう。その選択が、最悪な状況の引き金になってしまったとしても、私達はその場の空気に従ってしまうのです。

私はあの時の体験から、学校という閉ざされた空間で起こる「いじめ」本来の姿を見たような気がしました。あの張り詰めた空気感は、まさにいじめが発生するときの心理と深くつながっているのではないかと。

私が息苦しさを感じた正体。それは、集団による「同調圧力の支配」です。皆と同じでなければならぬという強い呪縛。それが一度教室を支配すると、個人の考えがかき消され、声の大きい意見や、多数派の意見だけが正しいものとして君臨し始めてしまう。個性を認めようと口では言いながら、私達はいつの間にか多様性を軽視してしまい、個性を直すべきものとして弾き出してしまうのです。

「恐怖に負けて、見てみぬふりをしてしまう周囲の態度」、それこそがいじめという冷たい空気を支え、育

ててしまう原因になるのです。周りが本当に支え、暖かく見守るべきなのはいじめという空気ではなく「一人の人間の心」のはずです。

あの日、私は集団という見えない檻に、自ら足を踏み入れてしまったのかもしれませんが、もし、周りとズレていると感じていた自分を、誰かが、あるいは自身が認め、信じていられたのなら、私は恐怖に負けずに声を響かせることができたのかもしれませんが。

今でも胸がキリキリと痛むのは、自分を守るために沈黙を選んだ悔しさだけではありません。私が本当に悔しいのは、「沈黙」という卑怯な態度そのものが、他人の違う意見を無言のうちに否定し、誰かを押しつぶす空気の一部になってしまっていた。ということです。

人と違う、あなたがあなたであることが美しい。誰かの声に無理に共感するのではなく、お互いの違う声を「そうなんだね」と受け入れ合える、そんな柔らかな空気を作る。そう誓います。恐怖に支配された沈黙ではなく、安心した柔らかな言葉を使える世界を、まずは目の前のあなたに。日本中に。そして世界中に。